

ウィンターオーバーシーディングを成功させよう ——冬も緑のフェアウェイを実現!!——

雪印種苗(株) 千葉研究農場 場長 山下 太郎

1 冬こそ緑がほしい!!

府県では、高標高地帯を除くと芝地のほとんどが「コウライシバ」・「ノシバ」などの暖地型芝草から成り立っており、「ノシバ」の学名は「ゾイシア・ジャポニカ」で、その名のとおりに、高温・多湿で代表される府県の夏場の気象条件に良く適応し、なくてはならない貴重な宝となっています。

暖地型芝草の宿命として、夏場の生育は最も旺盛となるが、晩秋から早春にかけては生長がストップし、緑あふれた芝地も枯褐色を呈するに至ります。退色した芝地も常緑庭園木や庭石などとはそれなりのコントラストを示し、観賞用としては趣きがあり、季節感^{なごみ}を漂せます。

しかし、陸上競技場・遊園地・競馬場・ゴルフコース等々では、冬場でも競技が行われ、徐々に茎葉部が擦り切れを起こし、冬損を受けやすい状態となり、翌春の再生が遅れ、甚しい個所は裸地となってしまいます。

今までは、そのような状態をパーフェクトに救済する手だてがありませんでした。JRAの競馬場やトレセンで実施されたイタリアンライグラス

「サクラワセ」のオーバーシーディングが、その規模・年次反復からみて、数少ない成功例であったと思います。しかし、その場合も、早春の除草剤散布によって、「サクラワセ」の衰退を促し、ベースの「コウライシバ」などの萌芽・再生を助長しており、まだ、パーフェクトな状態とは受け止めることができませんでした。

2 新品種『フェアウェイ』の誕生!!

私たちの農場で開発したオーバーシーディングライグラスは世界的にはアニュアルライグラス(英名)と称されるグループに属し、その品種名を『フェアウェイ』と名付けました。

ゴルフコースにおいて、ティのオーバーシーディングは既にほぼ技術的な確立をみており、次はフェアウェイを解決したいと研究担当者が頑張りました。

特に、暖地型芝草への移行(トランジション)が、通常の刈込み程度でスムーズに到達できることを重点目標とし、2か年のコース現場でのテストも重ね、種子生産も軌道に乗り、今秋より市販の運びとなりました。

目次



農村のアメニティ
(快適環境)の1つ、
農家の芝生

- 寒地型芝生の利用で、冬でもグリーンにノ……………表②
- ウィンターオーバーシーディングを成功させよう……………山下 太郎… 1
- 寒地型芝生品種と作り方……………立花 正… 4
- レンゲ栽培を見直そう……………安江 多輔… 8
- 九州地域における飼料作物栽培の現状と問題点……………近藤 聡…12
- 〈寒地型〉主要芝生用品種特性一覧表……………表③
- ウィンターオーバーシーディング専用ライグラス・フェアウェイ……………表④

本稿では、新品種『フェアウェイ』についての紹介と、それを活用したフェアウェイのウインターオーバーシーディングのポイントをまとめ、ご利用に際しての資としたい所存です。

3 ショートリリーフエース『フェアウェイ』の品種特性と利用性

新品種『フェアウェイ』は播種後のグリーンアップが早く、早春から春にかけての衰退が早い。したがって、単播条件での利用性は低く、暖地型芝草の冬季休眠期を狙っての追播導入で、その特色を最大限に発揮します。

各要素別に類似ライグラスと比較すると、下記のとおり整理することができます。

〔発芽の早さ〕・イタリアンライグラスと同程度で極めて優れ、ペレニアルライグラスより若干勝る。

〔葉色〕・イタリアンライグラスと比較し、若干濃緑、ペレニアルライグラスより淡緑。

〔葉幅〕・イタリアンライグラスと比較し、若干狭く、ペレニアルライグラスよりやや広い。

〔密度、生育期間〕・3月ころまでの密度はイタリアンライグラスより優れる。4月以降、気温上昇に伴い密度が低下し、イタリアンライグラス「サクラワセ」と比較し、明らかにその生育期間が短い。

利用特性① 春の草種移行が極めてスムーズ!!

『フェアウェイ』は春の生育衰退が早く、ベースとなる「コウライシバ」・「ノシバ」などとの生育競合がほとんど認められない。

したがって、ペレニアルライグラスやイタリアンライグラスで移行時に使用される除草剤などは省くことができる。この特色は『フェアウェイ』のみといっても過言ではない。

利用特性② 冬雑草を競合力で抑制!!

「コウライシバ」や「ノシバ」コースでは、冬期間にスズメノタカビラなどが侵入し、見苦しい状態となる。それゆえ、秋から冬にかけて除草剤処理が一般的に行われている。

『フェアウェイ』をオーバーシーディングすると、発芽・初期生育が旺盛でターフの形成も早く、スズメノタカビラなどの優占を抑え、また、混在し

たとしてもほとんど目立つことがなく、スズメノタカビラ防除を目的とする除草剤処理を割愛することができる。

利用特性③ 休眠中のベース芝を保護する!!

ベースとなる暖地型芝草は冬期間に損傷を受けると、春が来るまでその回復は期待できない。したがって、いかにダメージを与えないかがポイントとなるが、現実のゴルフコースでは要求することさえ無理なことであろう。守りが無理であれば、積極的な攻めということになり、ウインターオーバーシーディングが浮び上がってくる。このケースでは『フェアウェイ』に限らず、その再生・回復力によって密度が保たれ、ベース芝の茎葉部擦り切れが守られる形となる。

土壌水分が過剰の場合、ベース芝の根部活性が低下するが、『フェアウェイ』は草種的な耐湿性に優れ、葉部の旺盛な蒸散作用によって、過剰水分を軽減させ、休眠中のベース芝の根圏環境を改善保持することができる。

利用特性④ 美観及び競技適性の向上!!

ゴルフコース、ラグビー・サッカー場、競馬場等々では、「冬でも緑」ということで、その美観的効果は絶大であり、テレビブラウン管を通して、その美しさ・コントラストを堪能することができる。最も恩恵をこうむることができるのはプレーヤーであり、競技適性が高ければ高いほど、チャレンジ精神も高まり、かつ良い結果を求めることにつながる。ゴルフコースにおいては、コース管理フィーをはずんでも、プレーイングアビリティを求めるといふ方向に進むのではないのでしょうか？

4 新品種『フェアウェイ』の活用ポイント

まとまった利用が期待されるのは、その品種名が示すごとく、ゴルフコースのフェアウェイに集約されてきます。ここでは、そこでのウインターオーバーシーディング利用に焦点を絞り、説明を加えることにします。

(1) 播種期

関東の平場では9月中旬～下旬、西南暖地では10月中旬までが適期となる。

ベースとなる暖地型芝草に対する冬季緑化となり、秋冷に伴うベース芝の退色が一つの指標となる。厳密には、その年の秋の気象推移によっても異なってくる。

ここ3か年、千葉市での10月中旬播種で、その実用的な生育と効果が確認されており、極端な晩播き以外は失敗は少ない。

(2) 播種量

1平方m当たり50gが標準。専門書などでは、ライグラス類で100～150gという記載もあり、ベース植生の攪乱度合や播種方法によっても異なってくる。ベース植生の攪乱度が高いほど、種子が土壌と良く接触し、発芽効率も高まり、播種量を抑えることができる。しかし、営業が行われている状態での攪乱にはおのずと限界があり、バーチカルモア1～2回がけ、スリーパ処理を標準作業とし50gを設定した。

(3) 播種床の準備

前述したベース植生の攪乱と施肥方法がポイントとなる。

バーチカルモアも2回がけが実際上の限界となり、それ以上の攪乱を望む場合はコアリングを行う。種子と土壌の接触度が高まり、低刈り抵抗度も付与させることができる。

施肥については、ベース芝に対する施肥が十分行われていれば、追播時の基肥は省略することができる。この場合、ベース芝が休眠に入った段階で追肥を行う。窒素・リン酸・カリが成分量で1平方m当たり5g程度、1か月に1回程度を目途に施用する。

(4) 播種・覆土

面積が広く、機械播きが中心となろう。

シーダー播種の場合は、縦横2回播きで50gを播き切るよう調整する。覆土は必要としない。

ブロードカスターを利用しての播種では、種子の落ち過ぎやムラ播きが問題となり、粒状リン酸質資材による増量やトラクタ走行径路のとりかたについての配慮が必要となる。この場合、播種後の覆土が必要で、最少限2～3mm厚の目土を散布しローラで鎮圧する。

(5) 初期の養生

播種後、干ばつが続くと芽立ちに時間がかかる。

特に播種期が遅れた場合などは、年内の生育量を確保するため、発芽ぞろいまでは散水を行う。

(6) 刈込み

種子から育てる芝草の場合、どの草種も非常に繊細で、初期刈込み時は倒さないで刈込むような配慮が必要です。最初からギャングモアを使わずに、ロータリモアでの刈込みが好適です。

ただし、オーバーシーディングの場合は、ベース芝が支持体の働きをし、さほど神経質に考えずとも大丈夫です。『フェアウェイ』の表面が乾き、若干風が吹いている状態での刈込みが好適です。

5 省力的コースメンテナンスの追求

ゴルフコースにおける農薬の過剰使用について、主として環境問題とのかかわりで論議されてきました。今後は適期適量散布を原則に、その使用頻度を下げる方向でのコースメンテナンス技術の研究が進むものと思われます。

自然界の素材を上手に組み合わせることによって、除草剤の使用を削減することができます。本稿で紹介した新品種『フェアウェイ』とベース芝との組み合わせも、その事例の1つです。

飛行機の窓から眺め^{おろ}すゴルフコースの密集地帯、特に冬場の枯上がったコースが散在する光景を見ると、寂しい気持ちになってしまいます。ウィンターオーバーシーディングによる“冬も緑のフェアウェイ”が本格的に実現すれば、その景観も改善され、ゴルファー以外の人々にも心地良さを与えることになるでしょう。

暖地型芝地は冬期間どうしても枯色蒼然をさらすかたちとなり、メンテナンスでも除草剤を散布し、スズメノタカビラなどの寒地型イネ科草を抑制するのが通例でした。しかし、今後は新品種『フェアウェイ』を導入し、積極的に冬でも緑を維持する方向へシフトするのがトレンドになると思います。

『フェアウェイ』の本当の素晴らしさは、春が来ると特別な手だてをすることなく、その役割を終息します。かつて、このような草種・品種はありませんでした。品種的にはショートリリーフフェースであり、コースメンテナンスからみると、省力低コストの象徴と言えます。